



台北市の街並み

徳留 健太郎

大阪薬科大学薬品作用解析学研究室

研究課題、タイトル

Mutation of the gene encoding synaptic vesicle protein 2A (SV2A) markedly facilitates the kindling epileptogenesis in rats.

コメント

平成27年11月18日(水)から同年11月22日(月)まで台湾の台北市にある台北国際コンベンションセンターで開催された国際精神医学会2015および第4回アジア神経精神薬理学会の合同大会に参加し、自身の研究成果について発表をさせていただきました。また、本学会において、私はJSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2015を受賞することができ、ご指導いただいた先生方、並びに、選出していただいた学会関係者の皆様に対して、厚く御礼申し上げます。参加させていただいた学会の様子についてご報告させていただきます。

学会は18日の夕方より開催され、私達はWelcoming receptionより参加させていただきました。会場には台湾人をはじめとした多くの海外の先生方が、現地の食事を楽しみながら交流を深めておりました。学会はその翌日より本格的に始まり、私は覚せい剤やケタミンの依存に関する報告を中心に、それぞれの発表を拝聴させていただきました。台湾や中国などの地域では、薬物依存と言えば覚醒剤よりもケタミンの方が一般的であり、そのため、本学会においてもケタミン依存の報告が多かったように思えました。その中で最も印象に残ったのは、De-Maw Chuang (USA/Taiwan) 先生の講演であるRecent Advances in the Neurobiology of Mood Stabilizersでした。その内容を簡単に要約すると、ケタミンがうつ病の治療に有用であり、抗うつ薬と併用されることの多いバルプロ酸やリチウムとの併用によりケタミンで生じる認知機能低下を抑えるという内容でした。なぜ一番印象に残ったのかというと、ケタミンは覚せい剤と同様に精神病様症状を呈することが知られており、実際に臨床で使用する上で色々と問題が生じるためです。私は以前より統合失調症などの精神疾患の研究をしており、本学会を通じて得ることのできた情報あるいは知識を今後の研究に役立てたいと考えております。

私は英語でのポスター発表を始めて本学会で経験させていただきました。英語の研究発表を経験して、私は日常英会話だけでなく、自分の研究内容を英語で説明し、研究内容について英語で討論できるようになりたいと強く感じることができました。その貴重な経験のお陰もありまして、本学会後に英語で研究発表をさせていただく機会や海外の先生方と英語で討論する機会が増えたように感じております。本学会で得た経験をさらにも今後にも生かし、さらなる国際学会等にもチャレンジできればと考えております。

藤田 雅代

公益財団法人東京都医学総合研究所

研究課題、タイトル

Involvement of cholinergic system in hyperactivity in dopamine deficient mice

コメント

このたびは、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2015優秀演題賞を受賞させていただき、誠にありがとうございました。私は、以前は神経変性疾患の分野の研究をしており、精神神経薬理分野の研究を行うようになってからそれほど日がたっておりません。それにもかかわらずこのような賞がいただけましたこと、大変うれしく思っております。共同研究者の皆様にも、この場を借りてお礼申し上げます。

この分野での国際学会での発表は、初めての経験でした。今回のポスター発表は、国内外の方々に成果を発表し、意見交換を行う非常に良い機会となりました。今後の研究の発展に向けてとてもよい刺激となりました。

今回の受賞を励みに、さらに研究を進めていきたいと思っております。本当にどうもありがとうございました。



WPAIC2015色が際立つ会場内の様子。



台北101近くの大都会場
(Taipei International Convention Center)
外観の様子。



筆者（後列左から一番目）が発表を行ったシンポジウムにおいてシンポジストを務められたPo-Hsiu Kuo先生 (Taiwan)（後列左から二番目）、Chau-Shoun Lee先生 (Taiwan)（後列右から二番目）、Ichiro Sora 先生 (Japan)（後列右から一番目）、及び座長を務められたChia-Hsiang Chen先生 (Taiwan)（前列左）、Kazutaka Ikeda日本神経精神薬理学会現理事長 (Japan)（前列右）。

西澤 大輔

（公財）東京都医学総合研究所・依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Association between KCNJ6 (GIRK2) gene polymorphism rs2835859 and postoperative analgesia, pain sensitivity, and nicotine dependence

コメント

この度、台湾の台北において開催されたThe 4th Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP2015) (会長 Tung-Ping Tom Su 先生) の学会大会に参加しました。今回の大会は、私個人としては、2011年のソウルでの大会に引き続き、三度目のAsCNPの大会参加となりました。前回参加のAsCNP2011大会では、学会の初日の（Receptionを含む）Opening Ceremonyの直後に、別会場にて日本人参加者を中心とするAsCNP Japan Nightのパーティーが企画されていましたが、今回は、AsCNPの大会期間中にJapan Nightは開催されず、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2015の授賞式は大会のClosing Ceremonyの時間にClosing Ceremonyとは別の会場において行われました。私は前回の大会に引き続き、このような名誉ある賞を頂くことが出来まして、大変光栄に思います。そこで、雑駁になってしまいますが、AsCNP2015の大会の感想を述べさせていただきます。幾らかでも、本大会をあまりご存知でない方、また、本大会のような国際学会に関心のある方などの参考になれば幸いです。

今回の大会は11月20～22日の期間に開催されましたが、同一会場において4th Asian Congress of Schizophrenia Research (ACSR 2015) 及びThe World Psychiatric Association International Congress 2015 (WPAIC 2015) の大会が合同で開催され、こちらはそれぞれ11月18～20日及び11月18～22日の期間でした。特に、後者の大会はAsCNP2015よりも規模が大きく、AsCNP2015の大会運営もWPAIC2015の傘下のような形でなされていたようで、抄録の登録などもWPAIC2015のWebサイトから行うことになっていました。そのためか、会場の設営などについてもWPAIC2015の特色が比較的目立っていたようでした（図1）。私の日程としては11月18～22日のWPAIC2015の期間中の合同学会はほぼフル参加の予定でしたが、会場から遠くに位置するホテルを選択してしまったこともあり、思ったよりも移動などに時間がかかってしまい、初日のOpening Ceremonyに間に合いませんでした。台北の辺りは亜熱帯の気候に属するようなので、11月でも蒸し暑く、ホテルから会場まで健康のためと思い30分間程度の道のりを徒歩で移動したのですが、最初の5～10分で汗がダラダラと出るような状態でした。

さて、今回の大会が開催されました台湾は、私が訪れたのは二度目でしたが、街並みの様子は、看板などの記載が漢字ばかりとなっていることを除けば、やはり比較的日本に似ているように思いました。会場はTaipei International Convention Center (TICC) というコンベンションセンターで、台北での主要な観光名所のひとつである台北101の近くでした（図2）。本大会においては、日本人旅行者も多い台湾での開催ということもあった



石郷岡先生と受賞の記念撮影に臨む筆者。

のか、日本人の参加者は比較的多数派であったようにも思われました。このことはやはり、Neuropsychopharmacologyの研究分野において、日本が枢軸の一翼として重要な役割を担っていると考えられるかもしれません。構成としては、シンポジウムや口演・ポスター発表などの他、Satellite Symposia、Keynote Lectures、Special Lectures、State of the Art、等の様々なプログラムが多数組まれており、プログラムの内容としては、A WPAIC2015などとの同時開催という影響もあるのか、私が参加した前々回のAsCNP2011大会とは構成がやや異なる感じになっておりました。また、WPAIC2015の大会がメインの合同学会であったとはいえ、ACSR 2015及びAsCNP2015の固有のシンポジウム等も組まれていました。研究内容としては、依然として幅広いジャンルをカバーしているので、Neuropsychopharmacologyの研究分野が専門の方もそうで無い方も、また、（私が述べるのもおこがましいですが、）ベテランの研究者や臨床医の方のみならず、研究歴の浅い大学院生などにとっても、十分に得られるもののある学会と言えるかと思えます。総括致しますと、本大会における精神医学や神経科学、薬理学などの研究領域の研究者や医師の講演、及び研究者や医師との交流は、最先端の研究成果や治療の理解を促進する上で大変有意義であるように思いますので、本大会のような国際学会に普段あまり参加されていない方は、積極的に参加されてみることをお勧めします。

本大会においては、私はシンポジウムとポスターの両方の発表をすることになっており、少し準備が大変でした。シンポジウムでは、私以外のシンポジストとしては双極性障害に対するリチウムの治療効果に影響するGADL1遺伝子多型に関する研究内容で近年The New England Journal of Medicine誌に論文を公表されたChau-Shoun Lee先生 (Taiwan) をはじめ、Po-Hsiu Kuo先生 (Taiwan)、Ichiro Sora先生 (Japan)、などでした（図3）。私としては初めての海外での本格的な口演発表で、しかもシンポジウムということもあり発表時間が通常的口演発表などより長めなので、入念に準備をしようと、スライド提出期限の直前のぎりぎりの時間まで会場内の部屋でファイルの確認・改訂等を行っておりました。その後シンポジウムでの発表が始まり、途中までは順調に喋っていましたが、ある時点で、準備したはずのスライドが一枚抜けていることに気付いて、息を呑み、言葉が出なくなってしまいました。少しの間、前後のスライドを確認してみましたが、やはり見つかりません…。その後、やむを得ずそのスライドを抜かして発表を続けましたが、その時は何故無くなっていたのか検討が付かず、かなりショックでした。後に、事務局に提出したはずのスライドファイルを確認してみましたが、そのファイルにおいてもそのスライドが無いことが分かりました。つまり、提出後に不具合が起こったのではなく、提出直前に、自分でスライドを確認している段階で、誤ってそのスライドを選択したままBack spaceキーを押すなどして、そのスライドを削除しまっていたようです…。自分の不甲斐無いミスに愕然とするとともに、今後は提出前の確認はもっと余裕をもって充分慎重に行うようにすると決意しました。

JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2015の授賞式は先述のように大会のClosing Ceremonyの時間にClosing Ceremonyとは別の部屋の会場において行われましたが、その部屋で授賞式が行われることは、なんと本大会では事前には一部の応募者に通知が届いたのみであったようです。私の方には不運にも通知が届いておらず、授賞式の開始時、私は実際にClosing Ceremonyに参加しておりましたが、その途中で、同一所属機関の池田和隆日本神経精神薬理学会（JSNP）現理事長に声を掛けられ、慌てて授賞式会場へ案内されて、漸くそこで授賞式が行わ

れることを理解しました。後で聞きましたが、池田理事長もClosing Ceremonyの時に別の先生よりそのことをご教示頂いたそうです。そのようにして、バタバタとした状況の中、授賞式に臨むこととなりましたが、なんとか受賞者発表の時間に間に合い、記念撮影も受けることができました（図4）。なお、本大会において受賞対象となりました私のポスター発表の内容は、主としてpharmacogenetics/pharmacogenomicsに関するもので、他の演題と比較して幾分珍しい内容であったかと思いますが、今回このような立派な賞を頂くことができましたので、受賞者の名に恥じないように、また、受賞を励みとして、今後もNeuropsychopharmacologyの研究の発展に貢献できるよう、精進して参りたいと思います。

萩原 英雄

藤田保健衛生大学総合医科学研究所システム医科学研究部門

研究課題、タイトル

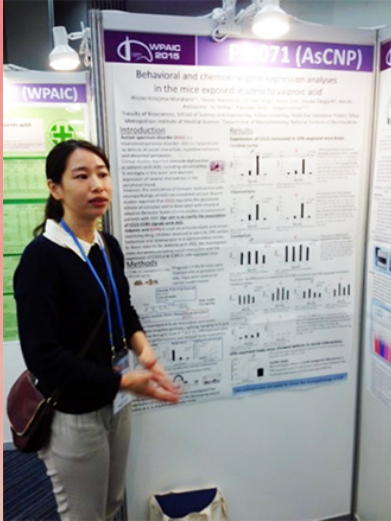
Neurogranin-deficient mice show behavioral abnormalities relevant to schizophrenia and neuronal immaturity in the brain

コメント

この度、11月20日(金)～22日(日)に台湾国際コンベンションセンターにて開催された第4回アジア神経精神薬理学会 (The 4th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology; AsCNP2015)に参加いたしました。この時期、日本では肌寒くなってきていた頃でしたが、会期中の台北は晴天にも恵まれたせいか少し蒸し暑いくらいの気候で、緯度にして10度くらいの違いですが、その差を体感しました。

今回の学会でとくに印象的だったのが、腸内細菌叢と脳機能との関連についてのシンポジウムでした。他の神経科学系の学会でもこのトピックの演題を目にする機会が最近増えてきたと感じていたところでした。本シンポジウムでは、自閉症の胎生期ウイルス感染モデルマウスや母子分離ストレスモデルマウスにおいて見られる行動異常が、ある種の細菌を投与することでレスキューされたという結果が発表されていました。そしてそれらのレスキュー効果の発揮には、炎症性サイトカインやセロトニン・ドーパミンを介したメカニズムが重要であることも紹介されていました。このように、脳の病気とされる疾患の原因を腸内に見出し、腸－脳相互連関が精神神経疾患の治療ターゲットになるかもしれないという点において非常に興味深く感じました。

最後になりましたが、この度、ポスター発表演題におきまして、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2015を受賞しましたことを大変光栄に存じます。日々の研究成果がこのような賞に繋がり大変嬉しく感じています。ご指導ご鞭撻を賜りました皆様、学会関係者の方々にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、今後とも研究に邁進していきたいと考えております。



古田島 浩子

東京都医学総合研究所依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Behavioral and chemokine gene expression analyses in the mice exposed in utero to valproic acid

コメント

2015年11月20日から22日に台湾・台北で開催されたアジア神経精神薬理学会に参加いたしました。アジア各国を始め、多くの研究者が集い、活発な学会で大変刺激を受けました。その中で、今回のAsCNP2015ではJSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2015を受賞させていただき、誠に光栄に存じます。

今回、アジア神経精神薬理学会に初めて参加させていただきました。台湾・台北は幼少時を過ごした場所であり、親しみと懐かしさを持って、11月の台湾に降り立ちました。夜に到着しましたが、治安も良く、にぎやかな繁華街の中を現地のホテル案内スタッフとリラックスしながら、歩いた記憶があります。

学会は基礎から臨床に至るまで多くの発表があり、活気ある雰囲気の中で、多くの議論が交わされていました。私は自閉症モデルマウスを用いた基礎研究を中心に行っておりますので、自閉症モデルマウスと腸内細菌との関連を示した研究が印象に残りました。poly(I:C)曝露によって作製された自閉症モデルマウスは、腸内細菌バランスの失調を示し、不安様行動や常同行動、超音波、社会性行動について異常を示すのですが、ペレットにて *Bacteroides fragilis* NCTC8343 (*B. fragilis*) を仔に食べさせると、増加していた腸内細菌が正常レベルに戻り、行動においても不安様行動、常同行動、超音波にそれぞれ改善が見られるようです。自閉症は現在も、病態が明確でなく、根本的な治療方法は見つかっていません。自閉症に関して脳を調べるだけでなく、体全体で何が起きているのか、それらがどのように影響し合っているのかを、追究していく必要があるのかもしれません。また、学会では臨床現場における取り組みに関する講演なども拝聴でき、大変興味深かったです。精神疾患に罹患した若者にとって通いやすい施設の環境づくりのために、サービスの一つとしてSNSを使用できる環境を整備したことなどは、「現場」の話だと強く印象に残っています。

本学会において、基礎から臨床に至るまで多くの研究に刺激を受け、自分の研究を見直すとともに、患者さんの役に立ち、なおかつ基礎研究として面白い研究を行いたいと改めて決意いたしました。



大井 一高

金沢医科大学医学部精神神経科学

研究課題、タイトル

Schizophrenia-associated genetic variants on chromosome 22q13 regulate NAGA and CYP2D6 genes expression in dorsolateral prefrontal cortex

コメント

この度、2015年11月20日から11月22日までの期間、台湾の台北市にある台北国際コンベンションセンターで開催されました第4回アジア神経精神薬理学会4th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP)に参加し、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNPを頂きました。このような素晴らしい賞を頂くことが出来まして、大変光栄に思います。今回は、World Psychiatric Association's International Congress of Psychiatry(WPAIC 2015)及び4th Asian Congress of Schizophrenia Research (ACSR)との共同開催でした。私自身、AsCNPは韓国で開催された第2回大会以来、2回目の参加でした。

今回発表したSchizophrenia-associated genetic variants on chromosome 22q13 regulate NAGA and CYP2D6 genes expression in dorsolateral prefrontal cortexというテーマは、私がアメリカJohns Hopkins大学にあるLieber Institute for Brain Developmentに留学中の研究テーマであり、留学中に本学会の演題登録を行いました。結局は、参加登録の数か月後に帰国して、日本から参加することになりましたが、演題登録当時は帰国が未定であったため、日本に一時帰国するついでに学会に参加しよう、あるいは学会参加ついでに日本に寄ろうという安易な考えで参加を決めました。

さて、台湾台北を訪れたのは、人生2度目でした。1回目は10年以上前にプライベートで訪れました。台湾食は日本人の口に合いおいしく楽しめましたが、1つ苦い思い出があります。かき氷が原因だと思いますが、帰国前から帰国後の数日間食あたりに苦しめられました。ですので、今回は食には細心の注意を払い、台湾を満喫してまいりました。留学から帰国直後であったこともあり、久しぶりに日本人研究者の先生方とお話することができました。顔馴染みの方、初対面の方含め、参加されている日本人研究者の先生方と議論したり、食事に行ったり観光(写真参照：映画「千と千尋の神隠し」のモデルと言われる町 九份(きゅうふん)と台北101)に行けたことで、非常に思い出深い学会となりました。



エントランス



ポスター会場



昼食のお弁当

森屋 由紀

東北大学大学院医学系研究科精神・神経生物学分野

研究課題、タイトル

Sex differences in the effects of adolescent stress on alcohol consumption in μ -opioid receptor knockout mice

コメント

2015年11月20日（金）から22日（日）に台湾の台北で開催された第4回アジア神経精神薬理学会 Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP)において、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2015を受賞しました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

今回は、世界精神医学会（World Psychiatric Assoc. International）、4th Asian Congress of Schizophrenia Research との合同開催だったので、普段交流が難しい研究者、医療従事者、製薬企業関係者の方々と国際交流ができたことが本当に素晴らしい体験となりました。

依存症問題や嗜癖問題に関わる基礎研究や臨床研究の国際的な専門家も多く、発表も世界最新の情報で多くのことを学びました。その中でも印象に残った演題が東北の被災地においてアルコール問題や精神疾患が増加していることに伴う被災地支援の調査、台湾で行われたうつ症状と睡眠時間に関連する研究、イギリスの自閉症の子ども達の性差を調査した研究でした。今後の研究の方向性について理解を深めることができました。

最後に、このような貴重な機会を提供していただいた、AsCNPそして、JSNPの皆様へ深く感謝するとともに、今後もより一層研究活動に尽力していく所存です。



押淵 英弘

東京女子医科大学精神医学教室

研究課題、タイトル

Counteraction of serotonin 5-HT_{2C} receptors expressed on the non-GABAergic neurons versus on the GABAergic neurons implicating a pathophysiology of psychosis

コメント

2015年11月20日から22日に台北にて開催された第4回アジア神経精神薬理学会に参加しました。色々感慨深い学会でありました。

台北は、20年ほど前の学生時代に訪れた場所であり、私の出身大学のある沖縄と気候が良く似ており、懐かしい気持ちとなりました。また、当時まだトロントに留学中の友人に本学会で再開し、台北の街を散策したことは嬉しいものでした。

さらに、朝のジョギングで偶然通りがかった地元大学の昆虫学教室に入れてもらい、たくさんの亜熱帯特有の巨大な昆虫の標本を見学することもできました。学童期に昆虫博士になることを夢見ていた私にとって、巨大なクワガタの無数の標本は学問への興味を改めて鼓舞してくれるものでした。これらの事は私にとってとても嬉しいものでした。と言いますのも、この学会の前年にUCSFでの3年間の留学を終え帰国していた私は、いわゆるポストアメリカデプレッションと思われる状態であったからです。

そのようななかで、本学会でJSNP Excellent Presentation Award for AsCNPに選んで頂きました。発表したデータは、留学先のラボで帰国直前に苦勞して得たものであり、報われたように感じました。大変有り難く思っております。

この場を借りて、これまで御指導頂いた諸先輩方とサポートしてくれた同僚と後輩に、感謝申し上げます。



堤 多可弘

東京女子医科大学神経精神科

研究課題、タイトル

Predictors of the efficacy of mirtazapine monotherapy